芸術哲学における不道徳主義

概要：芸術哲学および分析美学の文脈によると、不道徳主義は作品の道徳的な欠点が時に作品の美的・芸術的価値に貢献すると主張している。不道徳主義を支持するために、最近 Anne Eaton、Ted Nannicelli と Scott Woodcock が各自の論証を提出した。そして、Panos Paris が 2019 年の論文で以上全ての論証に反論した。本論文で、私が上述四人の文章を分析し、Paris の反論を踏まえて、Eaton、Nannicelli と Woodcock の論証の問題点について自分の考えを提出する。最後に、道徳の優先性に基づいて、二つの新たな不道徳主義を支持する論証の構想を説明する。

一、序論

現代分析美学および芸術哲学において、芸術作品における道徳的評価（the ethical criticism of art）或いは作品における道徳と美的・芸術的価値の関連性の問題はこの三十年間ずっと注目されている中心問題の一つである [1]。このテーマについて、大まかに三つの立場に分けることができる。まず、作品の道徳的メリットが作品の美的・芸術的価値に貢献すると主張している道徳主義的立場（moralism）がある。続いて、作品の道徳的な欠点が時に作品の美的・芸術的価値になると主張する不道徳主義的立場（immoralism）がある。最後に、作品の道徳的性質（即ち、作品が道徳に善い或いは悪い）と作品の美的評価とは無関係と主張する自律主義（autonomism）的立場もある。

かつて、芸術作品における道徳的評価について、争論の焦点が道徳主義と自律主義の間の矛盾だが、近年、争論が作品の美的関連をもつ道徳的欠点が常に作品の美的欠点になると主張し、倫理主義（Ethicism）と呼ばれている強いバージョンの道徳主義的立場と不道徳主義の矛盾に集中している。

本論文で、私が 2010 年以後に提出された最も有名な不道徳主義を支持する三つの論証、およびそれらを批判する 2019 年の Panos Paris の文章を分析し、Paris が言及していない不道徳主義を支持する三つの論証に存在するさらなる問題点について自分の観点を提出し、Paris の批判に存在する妥当ではないところを指摘する。最後に、自分の考えによる、不道徳主義を支持する新しい論証の構想を提出する。

具体的に、私がこれからの第二節で、芸術作品における道徳的評価というテーマにおける分析美学の文脈を説明する。続いて第三、第四、第五節で、Anne Eaton、Ted Nannicelli と Scott Woodcock の論証に関して、Paris の批判を踏まえて、分析する。最後の第六節で、道徳の熟慮的優先性に基づいて、新しい不道徳主義を支持する論証の構想を提出する。

二、基本概念

芸術作品の道徳的な欠点がある形で作品の美的・芸術的価値に貢献するのか、という問題は古代から今まで続けられている争論である。20 世紀 90 年代初あたり、芸術哲学に分析哲学方法が導入された以来、初めて、この問題がはっきりした文脈で討論することができるようになった。

分析美学において、この 30 年の間に、芸術作品における道徳的評価の問題は主に Berys Gaut が言う内在的関連問題（intrinsic issue）に集中している。（Gaut 2007, 8-9）すなわち、芸術作品の内在的な道徳性質のみに着目し、芸術作品が実際に鑑賞者たちの思想あるいは性格にどのような影響をあたえることができるのかという問題を論外にして、ただ作品の道徳性質と作品の美的・芸術的価値との関連性を研究する。

論証が始まる前に、まず、芸術作品における道徳的欠点は如何に定義されているのかについてはっきりする必要がある。Paris が最新の文章で提出した定義によると、ある作品が道徳的に悪いことであると判断する依拠は、その作品が不道徳的な行為に対して、容赦、支持、賛同などの態度を表し、あるいは鑑賞者たちに不道徳的な反応を要求することである。（Paris 2019, 15）すなわち、作品が不道徳的な行為を表現することだけで、その作品の道徳的欠陥にはならない。なお、鑑賞者たちに不道徳的な反応を要求することは作品が自分の態度を表現する手段であるゆえ、ある作品が不道徳的になることに必要なのは、作品が表現している不道徳的な行為に対して、さらなる容赦あるいは肯定的な態度である。したがって、不道徳主義が証明すべきことは、作品の不道徳的な態度が作品の美的・芸術的価値に貢献することである。

かつて、Matthew Kieran が不道徳主義を支持するために、不道徳的な内容を表現する作品が認識的価値をもつゆえ、美的認識主義的な観点から見れば、作品の美的・芸術的価値に貢献するという論証を提出した。（Kieran 2003, 56-73）残念ながら、上述の通りに、何の態度も表出せずただ不道徳的な行為を表現するだけの作品は道徳的に欠陥がある作品にはならないため、Kieran の論証が不道徳主義を支持する論証にはならない [2]。

Kieran の後継者として、近年 Anne Eaton、Ted Nannicelli と Scott Woodcock がそれぞれの不道徳主義を支持する論証を提出した。

三、Eaton の強い不道徳主義（robust immoralism）

Eaton による強い不道徳主義は以下のように要約することができる。

1. 作品が時に道徳的に欠陥があるキャラクターを魅力的な人として表現し、我々にそれらのキャラクターに対する好意的な反応を要求する。
2. 作品は道徳的に欠陥があるキャラクターに対して、我々に好意的な反応を要求することが作品にとって道徳的欠陥になる。
3. 二つの理由で、以上に述べられた道徳的欠陥が作品の美的メリットにある。まず、作品が我々に道徳的に欠陥があるキャラクターに対する肯定的な反応を要求することは鑑賞者たちの心の中に感情的なアンビバレンスを引き起こす。感情的なアンビ

バレンスを引き起こすことによって、作品がさらに人を夢中にさせ（compelling）、最終的に作品の美的・芸術的価値に貢献する。なお、作品は道徳的に欠陥があるキャラクターを魅力的な人として表現することは作品にとって、難しいことであるがゆえ、難しい目標を達成することは作品にとって美的メリットになる。（Eaton 2012, 281-292）

Paris が以上全ての主張に対して反論した。

Eaton の主張 1 に関して、彼女が自分の経験で、以下のキャラクターに対して、好意をもっていると述べている。これらのキャラクターは、「ロリータ」（*Lolita*）の Humbert Humbert、「失楽園」（*Paradise Lost*）の Satan、「俺たちに明日はない」（*Bonnie and Clyde*）の Bonnie と Clyde、「ナチュラル・ボーン・キラーズ」（*Natural Born Killers*）の Micky と Mallory、「ファイト・クラブ」（*Fight Club*）の Tyler Durden、「羊たちの沈黙」（*The Silence of the Lambs*）の Hannibal Lecter。Eaton がこれらのキャラクターに猟奇的ヒーロー（rough hero）という名前をつけた。しかし、Paris によると、私たちは実際に猟奇的ヒーローたちの不道徳的な特質で彼らを好きになるわけではなく、これらのキャラクターは必ず立派な特質をもっているゆえ、後者こそが我々が猟奇的ヒーローたちを魅力的だと思う原因である。例えば、Humbert Humbert が温厚でハンサムな人で、Hannibal Lecter は聡明で優雅という特質をもっている。猟奇的ヒーローたちの良い特質が充分に表現されている場合、これらの特質が不道徳の特質を「勝つ」ことができる。したがって、我々がキャラクターに対する全体的な態度が好意的になる。（Paris 2019, 17）

上述の理由で、Eaton の主張 2 も成り立たない。なぜなら、作品が人物の良い特質に対して、鑑賞者たちに肯定的な反応を要求することは作品にとって道徳的な欠陥にならない。（Paris 2019, 21）

Eaton の主張 3 の一つ目の理由に関して、Paris によると、Eaton が証明すべきことは、作品が人々を夢中にさせる根拠は作品の道徳的欠陥である。言い換えれば、不道徳は感情的なアンビバレンスの構成部分あるいは必要的なものでなければならない。しかし、類似的なアンビバレンスは良い特質と非道徳的な欠点（例えば、バカバカしい）をもつキャラクターによって引き起こすこともできる。したがって、Eaton の一つ目の理由による論証は実際に彼女が主張した通りの強い論証ではなく、弱い論証である。（Paris 2019, 22）

Eaton の主張 3 の二つ目の理由に関して、Paris によると、確かにキャラクターの不道徳は人々がキャラクターを好きにすることの阻害になるが、実際に美的・芸術的価値に貢献するのは不道徳ではなく、作品にこの阻害を乗り越えるために使われている芸術的テクニックである。したがって、理由二は不道徳主義を支持する論証にはならない。（Paris 2019, 23）

私の考えによると、Paris が Eaton の主張 3 の一つ目の理由に対する反論は必要以上に厳しい。さらに、もし Paris の反論が成立したら、同じ反論が Paris 自分も支持している倫理主義的立場（Paris 2019, 14）、特にその立場を支持する最も重要な論証である適正反応

論（merited-response argument）にも適応できる。適正反応論は、簡単に言うと、作品が鑑賞者たちに要求している反応が適正ではないことを作品の美的・芸術的欠点として認識し、該の反応が不道徳であることはそれが適正ではないことになる原因であるゆえ、作品の不道徳が作品の美的・芸術的欠点になると主張している。（Gaut 1998, 192-196）しかし、作品の不道徳は、作品が要求している反応が適正ではないことにとって、Paris の基準によると、構成部分ではなく必要的でもない。なぜなら、我々はしばしば道徳以外の原因である反応を不適正だと評価する。例えば、質が悪くて、滑稽的に見えるメイクをしている俳優がホラー映画に出演したら、観衆たちが怖がらないことになるだろう。しかし、適正反応論に対して、Paris が Eaton の論証に批判した通りに、類似的な反論が今までもなかった。したがって、私から見れば、Paris がある種のジレンマに陥った。Eaton の論証を否定するために、自分が支持している論証を損害しなければならない。

Paris より前に、Noël Carroll も Eaton の論証に反論した。Carroll の反論は主に二つの点に着目している。まず、Carroll によると、確かに我々がキャラクターの良い特質で該のキャラクターの道徳的欠点を最小化する（minimize moral failing）傾向をもっているが、我々がキャラクターの良い特質を肯定しながら、道徳的の悪を称賛しないこともできる（without endorsing immorality）。この反論は Paris が提出した Eaton の主張 1 に対する反論と似ている。続いて、Carroll によると、道徳的に欠点をもつキャラクターに対して、鑑賞者たちの好感を引き起こすことは Eaton が主張した通りに難しいことではない。なぜなら、欠点と良い特質を同時に有するキャラクターを作るパータンが大勢ある。（Carroll 2013, 371-374）

Carroll の反論に対して、Eaton が以下のように答えた。まず、Carroll の一つ目の反論は矛盾している。我々がキャラクターの良い特質で同じキャラクターの道徳的欠点を最小化する傾向をもっているなら、我々がキャラクターの良い特質を肯定しながら、道徳的の悪を称賛しないことはできない。Eaton によると、我々が猟奇的ヒーローに対する好意は避けられなくキャラクターの不道徳にも向かっている。続いて、Eaton が文学理論にある良いキャラクターを創造する複雑と難しさを論拠として、Carroll の二つ目の反論に再反論した。（Eaton 2013, 376-379）

私の考えによれば、Eaton の再反論が成り立たない。まず、Carroll の一つ目の反論は矛盾していない。道徳的欠点を最小化することと道徳的の悪を称賛しないことはまさに共存できる概念である。道徳的欠点がどれほど最小化されても、道徳的欠点が相変わらず欠点として認識されている限り、道徳的の欠点に対する称賛にはならない。前者の最大値はマイナスで、後者の最小値は「ゼロ」以上であるから。続いて、良いキャラクターを創造することの難しさは猟奇的ヒーローを創造することの難しさの論拠にはならない。道徳的欠点と良い特質を同時に有するキャラクターは必ず良いキャラクターであるわけではない。なお、人の心の中に好意を引き起こすことも良いキャラクターの必要条件ではない。鑑賞者たちに嫌われている悪役キャラクターも良いキャラクターになりうる。最後に、Eaton

自分も主張し、キャラクターの良い特質で同じキャラクターの道徳的欠点を最小化する傾向は、さらに猟奇的ヒーローが人々の心の中に好意を引き起こすことを簡単化にした。ゆえに、Eaton が自我否定の論証を用いている。すなわち、キャラクターの良い特質が同じキャラクターの道徳的欠点に対する反感を減らす効果は、Eaton の主張 3 の二つ目の理由と矛盾している。

上述の論述によると、Eaton の強い不道徳主義は、作品が我々に猟奇的ヒーローの良い特質ではなく、道徳的欠点に肯定的な反応を要求していることを証明できないゆえ、作品の不道徳的な態度の存在を証明できない。したがって、作品の不道徳的な態度が作品の美的・芸術的価値に貢献することも証明できない。さらに、猟奇的ヒーローが人々の心の中に好感を引き起こすことの難しさについての論証も不充分であるゆえ、成り立たない。Eaton の強い不道徳主義は不道徳主義的立場を支持する論証にはならない、と結論付けることができる。

四、Nannicelli の穏健的喜劇不道徳主義（moderate comic immoralism）と発生論的なアプローチ（genetic approach）

不道徳主義を支持する策略として、Eaton のように直接不道徳主義を支持する議論を作る手段以外、議論を喜劇作品に集中し、作品の不道徳が時に喜劇作品をさらに面白くする効果が証明されたら、面白くなくことは喜劇作品の美的メリットであるゆえ、不道徳主義的立場は少なくとも喜劇作品によって証明されることになる、という手段もある。そして、Nannicelli が提出した論証はこうした策略に属している。

Nannicelli が注目しているのは、喜劇作品がそれ自体の制作されている過程中発生した道徳的欠点が如何に作品をさらに面白くする問題である。彼が自分の議論を発生論的アプローチと呼んでいる。具体的な内容は以下のようになる：

相対的に厳重ではない道徳的欠点が人々の不調（unease）を引き起こし、非難される（reproach）かもしれないが、厳重な道徳的欠点のように、人々の嫌悪感（disgust）を引き起こすことができない。このような道徳的欠点は、喜劇作品が制作される過程中行ったある種の行為の結果として、時に作品の面白さに貢献する。少なくとも二つの場合で、テレビドラマ喜劇と喜劇映画の文脈に、以上の主張が成立する。それらは、子供を教導し、彼らを無礼な（offensive）行動をさせることと、詐欺或いは強制で、他人の可笑しい或いは愚かな様子を表すことである。（Nannicelli 2014, 171-176）

以上で述べられた一つ目の場合に関して、Nannicelli によると、『Wonder Showzen』というコメディ番組がヒトラーの服を着装している子供にヒトラーの振りをさせることが良い例になる。番組の制作者の行為は、たとえ後見人としての子供の両親の同意が得られても、子供に悪い影響を与えるかもしれない（例えば、子供の俳優が大人になったら、気まずく思う可能性がある）。しかし、子供がヒトラーの振りをすることが作品をさらに面白くした。（Nannicelli, 2014, 173）二つの場合において、Nannicelli が映画『ボラット 栄光

ナル国家カザフスタンのためのアメリカ文化学習』（*Borat: Cultural Learnings of America for Make Benefit Glorious Nation of Kazakhstan*）を例として説明した。映画の中に、イギリス人である主役の俳優がカザフスタン人の振りをしながら、しばしば反ユダヤ主義的、女性差別などの発言をし、相手の警戒心を下げて、相手自身の偏見を披露することをする。映画が記録しているのは、主役の詐欺的な演技による人々の真実的な反応である原因で、作品がさらに面白くなる、と Nannicelli が主張している。（Nannicelli 2014, 174）

Paris が Nannicelli の論証に反論した。まず、子供にヒトラーの振りをさせる場合で、Paris によると、今の時代ではもはやこうした子供がそのせいで周りの人に虐められる或いは差別扱いされることがない。すなわち、必ずしも Nannicelli が言った通りに子供たちに悪い結果をもたらすわけではない。二つの場合では、Paris によれば、他人の女性差別などの道徳的欠点を詐欺などの手段で披露することは不道徳的ではない。百歩譲って、ボラットを演じた俳優の手段が本当に不道徳であっても、実際に作品の美的・芸術的価値に貢献するのは他人のリアルの反応である。したがって、我々がその不道徳を忍耐しながら（despite their immorality）、作品を面白く思うことも十分ありうる。最終的に、作品の不道徳が作品の面白さに貢献することが証明できない。（Paris 2019, 31-32）

私は Paris の反論に賛同する。その上で、幾つかの補充したい点がある。

まず、私が指摘したいことは、Nannicelli が主張している一つ目の場合で、作品の不道徳がその行為が実際に子供たちにもたらした結果で判断されている。したがって、規範倫理学における功利主義によくなされている批判がこちらの道徳的判断にも適応できる。すなわち、その結果が如何に、どれほど遠い未来まで計算すれば良いのかという問題がある。実際に、映画『アダムスファミリー』（*The Adams Family*）の中で殺人ゲームに夢中している邪悪な子供を演じたクリスティーナ・リッチ（Christina Ricci）は、三十年経って、今は立派な俳優になった。三十年前に『アダムスファミリー』に出演した経験は悪い結果をもたらすわけではなく、むしろ彼女に俳優としての名誉をもたらした。悪い結果がある可能性を排除できないにもかかわらず、功利主義的な考えによれば、全体的な結果が良いであれば道徳的に良いことになる。したがって、結果から見れば、邪悪な子供という個性的、観衆たちに強い印象を残せるような良いキャラクターを出演させられることは、クリスティーナ・リッチにとって道徳的に良いことになるかもしれない。

続いて、Nannicelli は上述の二つの場合が何故道徳的に悪い行為になるということに関して、もう一つの解釈がある。それは、これらの行為が他人を道具として使っているため、道徳的に悪い。この解釈は、私の考え方では、成り立たない。何故なら、他人を道具として使ってはいけないという道徳的準則はカント倫理学の中に最も批判されていることの一つである。他人を道具として使うことは我々の日常生活中避けられないことであるため、常識中の道徳的中立の行為も道徳的に悪い行為として認識されるかもしれない。例えば、映画の制作過程中のすべてのスタッフは資本家が金銭を稼ぐための道具として認識されたら、映画制作自体が不道徳的な行為になるだろう。

最後に、Nannicelli による発生論的アプローチが一般的な分析美学の文脈による作品の道徳的欠点の定義に違反していると、私が思っている。第二節で説明された通りに、作品の道徳的欠点は作品自体が表している態度と関連している。しかし、発生論的アプローチによると、作品の道徳的欠点が作品の制作過程中発生した不道徳にも関わっている。私から見れば、後者の不道徳は作品の不道徳より、作品の制作者の不道徳と判断する方がより適切である。なお、作品の制作者或いは作者の不道徳と作品自体が表している不道徳とは別のものである。我々がハイデッガー自身の不道徳で彼の作品を低く評価することはしない、たとえその作品がハイデッガーの不道徳の行為による感想のかげで成り立ったものであっても。さらに百歩譲って、Nannicelli が言ったとおりに作品の制作過程も作品の芸術的特質（artistic property）に影響しても、（Nannicelli 2014, 177）製作者が製作する過程中の不道徳と作品の美的・芸術的価値とのつながりも弱い。一つの場合で実際に作品の美的・芸術的価値に貢献したのは喜劇理論の不適合効果（incongruity）、そして二つの場合で作品を面白くしたのはリアルの反応による没入感である。

したがって、Nannicelli の発生的アプローチによる喜劇不道徳主義は不道徳主義を支持するほど強い論証ではない、と結論付けることができる。

五、Scott Woodcock の相対主義的アプローチによる喜劇不道徳主義

Woodcock も喜劇に着目し、不道徳主義を支持する論証を提出した。彼によると、相対主義的な考えが作品の面白さを判断することに適応できる同時に、道徳的な善さ或いは悪さは客観的なことである。したがって、道徳的に悪い人が道徳的に悪い態度を表しているジョークをジョークの不道徳の原因で面白く判断する。不道徳主義がこれらの人にとって成立する。（Woodcock 2014, 203-216）

Paris によれば、芸術哲学における不道徳主義についての論証は、美的・芸術的価値および道徳的価値両方にある程度の客観性の存在が仮定されたため、有意義的な話になる。議論の形而上的な前提に違反することは、議論者たちに共有されているグラウンドから撤退すること（retreat from common ground）、或いはジョークの面白さだけを特別扱いすることになる。Woodcock の場合は恐らく後者であるが、いずれの場合にあっても、議論の説得力が下がることになる。（Paris 2019, 30-31）

私は Paris が Woodcock に対するここまでの反論に賛同するが、Paris のこれからの反論は Woodcock の議論を誤解したと、私が思っている。Woodcock の議論は主に Aaron Smuts の喜劇不道徳主義を批判する文章に対する答えである。Smuts が自分の文章で、相対主義的な考えに対しても反論した。彼によると、相対主義的な考えは極端に邪悪な人にのみ適応できる。何故なら、喜劇不道徳主義が証明すべきことは、人々がジョークの不道徳をはっきりと認識した上でまだジョークがその不道徳のかげでさらに面白くなると思うことである。大部分の人が自分を笑わせたジョークの不道徳を認識せず、これらの人にとって、喜劇不道徳主義が成立しにくい。逆にジョークの不道徳を認識した上でさらに激し

く笑う人は相当に邪悪な本性をもたなければならない。そのゆえに、こうした人間の数もかなり少ないはずである。したがって、相対主義的な考えの適応場面がかなり限られている。（Smuts 2009, 155）Woodcock の文章の重要な目的は Smuts の以上の主張に対して反論することである。Woodcock が証明したいことは、相当に邪悪な人ではなくても、人々がある特定なジョークの場合で、ジョークの不道徳を認識した上でも笑うことがある。しかし、Paris の理解によれば、Woodcock が擁護したいことは、喜劇不道徳主義が成立させるために、人々がジョークを面白く思うことにとって、ジョークの不道徳を認識することが必要ではない。

私の考では、Woodcock の文章の要旨を誤解することはかなり難しいである。なぜなら、Woodcock の文章の一番重要な目的はその文章の要旨と結論にはっきり書かれている。たとえ文章全体を読まなくても、Woodcock の意図が理解できる。Woodcock が Smuts に反論する一番重要な策略は、Ronald De Sousa が提出した悪意的なユーモア（phthonic humour）において、（Sousa 1987, 275-290）道徳的に欠陥がある人々（例えば、種族差別主義者）がまさに悪意的なジョークが一般的な道徳基準に違反し、他人（特にジョークが嘲笑う対象）に強烈的に反対することをはっきり認識したゆえ、あえて笑うということを説明する。そして、悪意的なユーモアを楽しんでいる人々がすべて邪悪な本性をもっているわけではない。したがって、相対主義的な考えの適応範囲は Smuts が言った通りに狭いではない。広い適応範囲をもつ相対主義的な考えは喜劇不道徳主義を支持することができる。（Woodcock 2014, 210-212）

しかし、Woodcock が悪意的なジョークに対する説明はまだ不充分である、と私が考えている。確かに、悪意的なジョークの不道徳がジョークの面白さに貢献した可能性が排除できないが、二つの作品の不道徳およびジョークの面白さに全く関係していない解釈も存在する、と私が指摘したい。一つ目の解釈は、作品の不道徳が面白さと関連なく直接笑うという反応を引き起こした。すなわち、人々が笑う原因は作品の面白さではなく、その作品の悪意である。笑うという行為も嗜虐的な快感による反応になる。二つ目の解釈は、種族差別主義者同士が同時に種族差別的な態度を含むジョークを読むときに、彼らが同時行った笑いという行為の原因は作品の面白さではなく、ある集団に属すことによる群集心理である可能性もある。嗜虐的な快感と群集心理のいずれの場合でも、作品の不道徳が作品の面白さに貢献しない。すなわち、作品の不道徳が作品の美的・芸術的価値に貢献しない。したがって、Woodcock が証明すべきことは、悪意的なユーモアの道徳的欠点が作品自体の面白さに貢献したため、人々が笑ったこと、さらに、作品の道徳的欠点が作品の美的・芸術的価値と関連なく直接笑いという反応を引き起こしたわけではない。残念ながら、Woodcock が以上の点についての説明が欠けている。

結論として、Woodcock の喜劇不道徳主義に関する相対主義的アプローチの論証も充分ではない。

六、結論および芸術哲学における不道徳主義の未来

私がこの文章で、芸術哲学における不道徳主義を支持する試みとしての最新の三つの論証を分析した。

まず、Eaton の強い不道徳主義の論証は、鑑賞者たちが実際に魅力的だと思われることはキャラクターの良い特質ではなく道徳的欠点であることをうまく証明できなかった。さらに、Eaton が Carroll の反論に対する二つの答えは自我破壊的であるゆえ、自分の論証を守ることができないだけでなく、自分の二つ目の論点をさらに弱化した。

続いて、Nannicelli の発生論的アプローチについての説明は、結果論的判断および問題含む道徳ルールを採用した原因で、結果論にしばしばなされている批判が避けられない上に、作品の制作過程に行われた行為が実際に不道徳的であることを証明できない。さらに、発生論的アプローチが着目しているのは作品自体の不道徳ではなく、作者の不道徳であるゆえ、発生論的アプローチによる不道徳主義はかなり弱い論証になる。

最後に、Woodcock の相対主義的アプローチは、悪意的なユーモアの道徳的欠点が作品自体の面白さに貢献することをうまく説明できなかったゆえ、喜劇不道徳主義を支持する論証になりにくい。

以上すべての不道徳主義を支持する論証が各自の問題点を含んでいる。さらに、かつて Matthew Kieran が提出した論証も大勢の哲学者たちに批判されている。不道徳主義を支持するすべての重要な論証が失敗した以上、芸術哲学における不道徳主義という立場は結局誤っているのか？

ここで、私は不道徳主義の未来を支持する二つの論証の構想を提出したい。私から見れば、不道徳主義を支持するために、我々が道徳および不道徳の本質に着目すべきである。道徳義務の重要な特性は、ヘアが定義した優先性（overridingness)、(Hare 1963, 168-170）あるいはバーナード・ウイリアムズが述べた最高の規範力をもつことである。（Williams 2011, 193-218）そして、不道徳は道徳義務を違反することである。

したがって、まず、道徳義務の最高の規範力をもっている以上、それを違反するために、人々が不道徳的な行為を行う理由は道徳と同等或いはそれ以上の力をもたなければならない。ゆえに、不道徳が芸術的な表現手段として、ある理由或いは考えがもつ力、或いは重要性を表現することには一番効果があるはず。さらに、反抗的なアート（transgressive art）において[3]、道徳義務が一番高い優先性をもつゆえ、道徳に違反すること（すなわち、不道徳であること）は一番大きい反抗になる。上述の強い表現力と一番大きい反抗行為としての不道徳が、いずれの場合でも作品の美的・芸術的価値に貢献するだろう。

哲学者の最近の不道徳主義を支持する試みが失敗したかもしれないが、作品の不道徳が美的・芸術的価値に貢献する可能性はまだ存在する。言い換えれば、芸術哲学における不道徳主義はまだ未来がある。

注：

1. Berys Gaut によると、芸術作品の美的価値（aesthetic value）と芸術的価値（artistic value）は同じものである（Gaut 2007, 34-41）。この主張も作品における道徳的評価というテーマの研究者たちに受け入れられている。したがって、私が美的・芸術的という語でこうした価値を示している。
2. Kieran の論証に対して最も有名な反論は James Harold の文章である。（Harold 2008, 51-59）
3. 反抗的なアートは映画監督 Nick Zedd が提出した概念である。（Sargeant 1999, 43-78）概念の提出は 20 世紀後半のことだが、概念自体がそれより古い作品にも適応できる。例えば、サド侯爵の小説はしばしばブルジョワジー価値観に対する反抗として認識される。

参考文献：

Carroll, N, (2013), 'Rough Heroes: A Response to A. W. Eaton', in *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, Vol. 71.

Eaton, A. W., (2012), 'Robust Immoralism', in *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, Vol. 70.

(2013), 'Reply to Carroll: The Artistic Value of a Particular Kind of Moral Flaw', in *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, Vol. 71.

Gaut, Berys, (1998), 'The Ethical Criticism of Art', in Jerrold Levinson (ed.), *Aesthetics and ethics*, Cambridge: CUP.

(2007), *Art Emotion and Ethics*, Oxford: OUP.

Hare, R. M., (1963), *Freedom and Reason*, Oxford: OUP.

Harold, James, (2008), 'Immoralism and the Valence Constraint', in *British Journal of Aesthetics*, Vol. 48.

Kieran, Matthew, (2003), 'Forbidden Knowledge: The challenge of immoralism', in José Luis Bermúdez and Sebastian Gardner (ed.), *Art and Morality*, London: Routledge.

Nannicelli, Ted, (2014), 'Moderate Comic Immoralism and the Genetic Approach to the Ethical Criticism of Art', in *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, Vol. 72.

Paris, Panos, (2019), 'The 'Moralism' in Immoralism: A Critique of Immoralism in Aesthetics', in *British Journal of Aesthetics*, Vol. 59.

Sargeant, Jack, (1999), *Deathtripping: An Illustrated History of the Cinema of Transgression*, London: Creation Books.

Sousa, Ronald, (1987), *The Rationality of Emotion*, Cambridge: The MIT Press.

Smuts, Aaron, (2009), 'Do Moral Flaws Enhance Amusement?', in *American Philosophical Quarterly*, Vol. 46.

Williams, Bernard, (2011), *Ethics and the Limits of Philosophy*, London: Routledge.

Woodcock, Scott, (2014), 'Comic Immoralism and Relatively Funny Jokes', in *Journal of*

Applied Philosophy, Vol. 32.